

主の昇天

2012.5.20 高円寺教会 9:30 ミサ

イエズス会 英 隆一朗神父

使徒言行録 1・1-11

エフェソ 4・1-13

マルコ 16・15-20

今日は、主の昇天の祝日に当たっています。イエス様が復活されてから 40 日後、オリーブ山の頂上から天に昇ったというふうに言われています。本来ならば、先週の木曜日が 40 日目で、伝統的にはそこでお祝いするんですが、日本では木曜日は集まりにくいので、日曜日に振り替えて主の昇天をお祝いしています。第一朗読では、その姿が描かれているわけですがけれども、復活したイエス様が話し終えると、彼らが見ているうちに天に上げられて、雲に覆われて見えなくなった。「イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた」。想像するとちょっと気味が悪いっていうか、話してたら急に上の方にぴゅーっと釣りあげられるように上に行って、弟子たちが下からぼかんと眺めてたという感じで、主の昇天というのは、イメージ化するとなんかちょっと滑稽な感じがして、もうひとつちょっとぴんどこないところもあるような気がします。あるいは、今日のマルコの福音書では、「弟子たちに話した後、天に上げられて、神の右の座に着かれた」と。ルカの方では、「雲に隠れて見えなかった」ってあるんですが、マルコでは「神の右の座に着かれた」、それは下から見たらその様に見えたっていうことだと思いますが、なかなか実感としてぴんどこないところもあるような気がします。

主の昇天のところを、神様の側から、天のお父様から、父なる神からこの姿を見たときに、この主の昇天はどのようなものだったのか。父なる神はイエス様を 30 年、33 年くらい前に地上に送られて、マリア様からイエス様が誕生されたわけですが、そこから、天の御父はイエス様を地上にいわば派遣されたわけですね。そして、ベツレヘムに生まれるという貧しさの中の誕生から、イエス様の一生は地上における恵みとそして苦難の、そして最後は十字架上で亡くなるという非常に悲劇的な最後を遂げられたわけですが、最終的に、天の御父のところにはイエス様は戻っていったということになるわけですね、主の昇天をもってして。それが、御父にとっていったいどれほどの喜びだったかということですね。ある意味、天の上の世界がイエス様のいわば本来の住んでおられた場所であって、そこから長い間家から離れて、つまり自分のマイホームから

離れて苦しみの中を生きてきた。そして、ようやくこの主の昇天をもって、イエス様は元のおられた世界に戻ることができたということですね。そのときの御父の喜びはいったいどういうものであったのか。そして、イエス様の喜びはいったいどういうものであったのかということを考えるときに、この主の昇天ということがどれほど大きな喜びであったかということは、ちょっと想像してみるだけで、何か大事なものだということがわかるのではないかと思います。

実は、ここで思い出すのは、あの放蕩息子の話なんですね。放蕩息子は父の家からまあ彼は自分勝手に出たわけですけど、最後戻ってきた。もちろん、舞台設定が全く違うので、単純には比較出来ないですけども、ある意味イエス様は神様から遣わされた放蕩息子のようなものであって、自分自身が罪を犯したわけじゃないけど、人々の罪を一身に負うためにこの地上にいわば派遣されたというか、島流しのような形になって、そして、この主の昇天をもってやっと父なる神の元にイエス様は戻ったんですね。この放蕩息子のお父さんが、家出した息子が戻ってきたときにいったいどれほど大きな喜びであったのか。何年間かわからないけれども、どこに行ったかわからないどろどろの苦しみの中で、そして帰ってきたときには本当にぼろぼろの服で、何にもなくて、放蕩息子はお父さんの元に戻ってきた。そのお父さんの喜びを考えると、いったいどれほどのものだったのか。そして、イエス様の場合は、神の子でありながら貧しく生まれて、そして、十字架上でそれこそものすごい大きな苦しみの中に、いわばどろどろの血まみれの姿になって苦しんでおられた。そして、そのような苦しみを超えて、イエス様が御父の元に帰っていったわけですね。この主の昇天のときに、御父とイエス様とがどれほど大きな喜びの中で包まれたか。天の国における喜びは、想像を絶するくらいに大きな喜びであったということはまず間違いないのではないかと思います。

この主の昇天の喜びを、このミサでやはり一番は味わいたいというふうに思うんです。それと、もうひとつのことは、イエス様がこの主の昇天で父なる神の家に戻って、大きな喜びと、すべての重荷を解かれて御父との深い交わりというわけですね、たぶん天で大きなパーティーをして、大きな喜びであったと思われかもしれませんが、主の昇天は、今日の入祭唱にあったように、こう書いてありますね。「主の昇天に私たちの未来の姿が示されています」と書いてあるわけですけども、わたしたちも将来、その父なる神の国にわたしたちも昇っていくということなんですね。わたしたちは、この地上で生きているということは、放蕩息子のように、いわば父なる神の家から離れてしまった、その苦しみの中にわたしたちは歩んでいるというふうに言えると思います。様々な困難や苦し

みや、そういうものの中でわたしたちは、場合によっては苦しんだり、あるいは喜んだりしてる。でも、最終的には、わたしたちはその天の国に帰って行く。イエス様が最初だったわけですけども、わたしたち全てその天の国に帰って行くことができるわけですよ。そのことを心にまた刻みたいと思います。

わたしたちも全員、ある意味、放蕩息子、放蕩娘。でも、この地上でわたしたちがなすべきことを、あるいは罪を犯したり失敗したり、あるいは人を愛したり愛せなかったり、喜んだり悲しんだり、わたしたちは天に帰る日まで、様々な、神様から離れた苦しみを体験しなければならないことは多々あるだろうと思います。でも、最終的にはわたしたちは父なる神の家に帰って行くことができる。そこに帰ったときに、わたしたちの苦しみの悲しみも全て終わると思いますね。そこで全ての重荷を置いて、父なる神の懐に戻ることができるんですよ。それをわたしたちは待ち望みながら、この毎日毎日を歩んでいるということですね。だからこそ、わたしたちの苦しみや悲しみは、別に絶望するほどのことではない。いくら神様から離れてしまったように思ったとしても、わたしたちは父なる神の家に帰って行くことができるわけですね。わたしたちは、今のところは放蕩息子や放蕩娘、ある程度ですね。父なる神の家から離れてしまって、この地上に生きて以上、ですね。でも、この今の状況は、最終的には、イエス様の昇天と同じ様に、わたしたちも父なる神の家にもどることができる。そして、そのときに、全ての重荷や全ての苦しみを終えて、イエス様と御父と、そしてマリア様とか聖人と共に、全ての苦しみを終えて、永遠の喜びの中にわたしたちは入ることができるということですね。そして、それを、放蕩息子のお父さんのように、イエス様と御父は待ち続けていると思います。わたしたちが天の国に戻るのを、イエス様と御父がどれほどの待ち望んでいる気持ちで待っておられるかということですね。

今日は、イエス様と御父との再会というか、もう一度共に暮らせる喜びを味わいながら、わたしたちもその将来、その本当の喜びに与れる、その希望のうちに生きたいと思います。だからこそ、主の昇天は、わたしたち全ての人の希望である。光であるし、力であるということですね。それをわたしたちが願いながら、その将来の喜びを、わたしたちもちょっと楽しみながらですね、待ち望みながら歩いていけるようにしたいと思います。